第57回 メーデーに参加しよう

働くものの団結で 生活と権利・平和を守ろう

今年はメーデー起源一〇〇年

労働時間短縮全面に

今日よりのちは
一人の労働者も
八時間以上働くな
八時間の労働
八時間の休息
八時間の教育

これは、メーデーの起源となった一八八六年五月一日、アメリカの労働者が「八時間労働日」を要求してゼネストに入り、集会やデモで、また工場でうたわれた歌です。

ことしのメーデーは、このアメリカの〝時短ゼネスト〟からちょうど一〇〇周年の記念すべきメーデーとなります。

中央集会のメーンスローガンには、「働くものの団結で 生活と権利を守り 自由で平和な日本をつくろう」が掲げられ、サブ・スローガンは「労働時間の短縮」「平和憲法擁護」「参院選・総選挙の勝利で政治の転換」など十三課題です。

メーデーの参加者は、全国約千二百会場で、四百万人を上回るものとみられています。また、統一メーデーも年ごとに増加し、東京の中央メーデーをはじめ、大阪、群馬、広島など二十二都道府県にのぼっています。

ことしの中央メーデーでは、メーデー起源一〇〇周年を記念して「五月一日を『働くものの日』として国民の祝日」の特別決議が採択されます。

アメリカの労働者はいまから百年前の五月一日、八時間労働制を掲げてシカゴを中心に一万五千五百六十二企業の労働者三十五万人がゼネストに突入、わずか一週間足らずの間に十数万人の労働者が八時間労働の協約を獲得、その後、二十万人を超す労働者の時間短縮が実施され、大きな成果をあげました。

いま、日本では、欧米と比べ約三百時間も長い労働時間の短縮が大きな課題となっています。

その時短闘争の前進へ向け、世界で労働時間短縮の記念日とされる「メーデー祝日」の声を五月の空にひびかせましょう。

先輩の遺志継いで

—追悼法要を終えて—

三池じん肺会会長 山根重人

三池じん肺会が結成されて二十二年目を迎えて、それまでに亡くなられた方の二十三回忌と、さらに毎年もだえ苦しみながら企業の犠牲となった百二十三人の追悼法要を三月二十八日、午後一時三十分から白雲社大牟田祭場で多数の参列をえて、盛大にそしてしめやかに営まれました。

当日は、亡き僚友の死を悲しむように小雨が降り、心配された参列者も会員をはじめ遺家族の皆さんが続々とつめかけ、午後一時には会場がいっぱいになりました。

組合代表、主婦会代表、地評や政治局代表など、参列いただいた来賓の皆さんに心から感謝しお礼を申しあげます。

三池じん肺会が歩いてきた道は、まさにいばらの道であり、苦難の道でした。合理化に次ぐ合理化、そして首切りに次ぐ首切りが強行され、ついに総資本対総労働の対決に発展したたたかいを契機として、組織は分裂し、重労働、低賃金、差別が公然と行われ、苦しみの連続でした。

身体はぼろぼろになり、けい肺の認定申請に対しても組織を替わるなら申請してやると言われ、組織に残るか、わが身を守るかで、本人はむろん家族の皆さんも悩まれた方が数多くあったこともまだ記憶に新しいことです。

このような苦しみに耐えながら、先輩たちは組織を守ってたたかいつづけてきました。

いま中曽根内閣は、労災法の改悪をはじめ、弱者切り捨てを強行し軍拡路線を押し進め、再びあの暗黒時代に逆戻りしつつあります。

私たちは先輩の遺志を継いで、悲惨な労災職業病根絶のためにたたかいつづけるとともに、今の政治の流れが少しでも変わらないかぎり、弱者が救われる道はないことを、法要を機に決意を新たにし、努力しなければならないと考えています。

今後ともご支援、ご協力をお願いいたします。

三池炭鉱の暮らし

嫌われた納屋

第六回

武松輝男

「家は広かほうがよかァ」

炭鉱納屋のように、一間だとか二間だとか、立居振る舞いがすべて目につく生活をしていると、振る舞っている本人はそうでなくても、見ているほうで癇に触ることがある。そういうときは、襖や障子の閉める速さ、閉まるときの音、それに敷居をまたぐ足の動きかたまで気になるもので、普段と全く同じ動作が繰り返されているにもかかわらず、それが普段と違ったように見えてくるから不思議である。

夕膳に差し向かいでいるときも、漬物を噛む音が、琴の響きのようにまろやかで、リズムがあって、ころころと聞こえたかと思うと、次に聞くときは、歯茎に亀裂が入るように重く、痛く聞こえる、というようなものだ。

これは、人間の感性、感情というものが滑らかなものでなくて、緩急自在、凸凹変化、軽重転変であって、気温、天候、労働、金銭それに混濁、清浄など、周囲の条件次第では、どうにでも変わりうるものだ、ということである。

この人間の感情の変移を住居に当てはめてみるとよくわかるが、住居が狭いことが、どれだけそこに住む人々の感情を逆撫で、荒だてていることか。

話を急に現代に移すが、最近、熟年をふくめて離婚が増えていると報道されている。性格の不一致などと、その原因が語られてはいるが、離婚をした人たちの住居はどうであったのか。アパートに住んでいて、たとえ三間あったにしても、アパート間という新語を生んだほどの狭さが、離婚の原因の奥に匿されているのではないか、と思うときがある。日本のカーブームは、この部屋の狭さから逃れるために生まれたもの、と言う人もいるぐらいで、靴を脱ぎ素足でないと乗れない自動車を見かけることがある。これなどは移動小部屋とでも言うものだろう。

社内報などで、趣味は、と問われてドライブと答えているのをみると、いささか面喰らってしまう。しかし、部屋の狭さから逃れて、広い野原の爽快さを味うための手段、という意味が含まれているとすると、家の狭さというのが、そこに住む人々へ与える影響は、普通の思考では計り知れないほど大きいものだと言えるだろう。

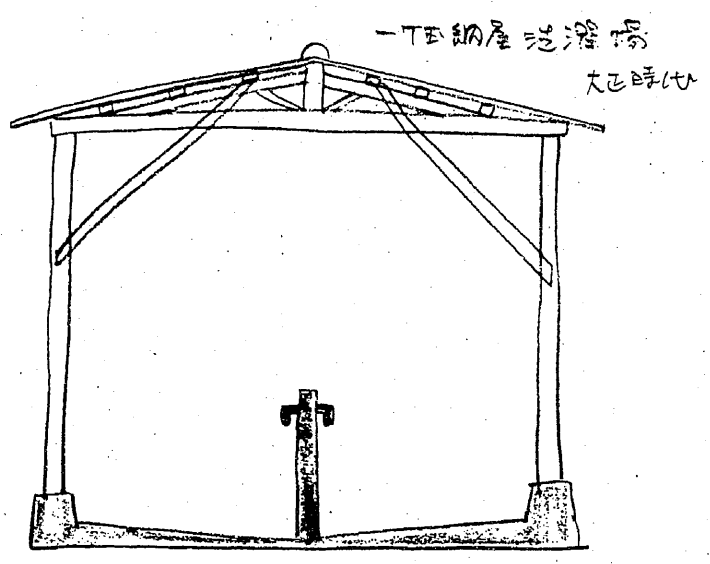
三池炭鉱昔ばなし、その一、社宅の移り変わり(三池時報、昭和四十年)に、庶務主管発の文書(大正六年一月二十二日)を記載しているが、その文に次のような一文がある。

「坑夫ノ品性ノ向上著シク、彼等ノ自尊心モ亦高マリテ、彼等ノ住居ヲ納屋ト称セラルルコトヲ嫌ウ傾向アリ、募集上モ多少ノ関係アリテ、元来納屋ナルモノハ人間ノ居住スベキ建物ニハ無之……」

一部屋か、あるいはせいぜい二部屋の棟割り納屋。前掲の文書が述べているように、その呼び名が納屋、というそのことだけで坑夫たちに嫌われていたのではなくて、人間が共同で生活していくためには(夫婦も共同生活)、ある足まった広さが要る。その広さがないと、絡み合った感情のもつれを解かすことができない、そのことが坑夫たちに嫌われた真の原因ではないか、と思うのだが。

石炭を掘るだけに必要な、利潤を生み出すだけに必要な最小限度の広さが納屋であった。ところがそこに住む坑夫を管理する世話方と職制の住居は、社宅と呼ばれ、感情のもつれを解すだけの広さが与えられていたのである。

(カットも筆者)



原告団

桜の花も満開

遺族会が団結旅行

遺族会の年間行事になっている団結旅行を、今年は山鹿温泉プラザで催しました。

ちょうど桜の花が満開という絶好の花日和に恵まれて、会員の参加もいままでの最高で、一日を楽しく過ごしました。

以前は、心から正月も祝えないということから、新年早々に地元で団結集会を開いていたのですが、せめて年に一回温泉にでもということになり、玉名をふり出しに今年で十二回目になります。

毎年、行先を話し合って決めていますが、二年前から一月は寒いので春にしようということになって、四月の第一日曜日になりました。

できるだけ節約して送迎バスを利用していますが、この日もバスに乗り込んでしばらくすると、手拍子よろしくそれぞれ自慢の歌などが出る和やかさです。

現地に着いて早速第一部をはじめ、組合から芳川部長が和解交渉の現状について報告を受け討議しました。また、弁護団の本多先生から今後の問題などの説明を受けて理解を深めました。

第二部は、会食しながら広間で催されている芝居などを久し振りに見物したり、湯につかったり、会員さんが趣味で練習している踊りなどが披露、にぎやかに過ごしました。

帰路には日輪寺にお参りし、満開の桜を満喫、帰りのバスの中でも歌をうたい、『頑張ろう』の合唱でしめくくり、三池遺族会としてさらに団結して、今後の和解交渉へのぞむ決意を固め合って、それぞれ帰途につきました。

(遺族会事務局長・永江美由紀)

時の問題

「テンノー」Q&Q

天皇在位60年って?

今の天皇が即位(位につく)してから六十年になる、ということ。大正天皇が死去したのが一九二六(大正15)年十二月二十五日で、今の天皇がただちに即位し、この日から「昭和」と改元された(だから、昭和元年は十二月二十五日から三十一日までの七日間だけ)。在位六十年目というなら、今年十二月二十五日がそれに当たる。

だが、この昭和の六十年間をひとまとめにして〝奉祝〟していいのだろうか。少なくとも、最初の二十年間は、天皇の名において行われた侵略戦争と弾圧の歴史の期間だった。この時代まで含めて〝奉祝〟すれば、侵略戦争まで〝奉祝〟することになってしまう。